

海外派遣研究者(学長裁量経費)報告書

ケルン体育大学出張報告

重岡孝文
(武道講座)
平沢信康
(体育学講座)

はじめに

本学は、平成13年度年度計画において、国際交流に関する事項のなかで「欧米の大学を含め、教官の国際交流に努め、大学間交流協定締結校の拡大を目指す」と謳っている。そこで国際交流・大学開放委員会の委員を務める報告者は、新たな交流協定締結校の候補としてヨーロッパにおける名門体育大学であるケルン体育大学 *Deutsche Sporthochschule Köln* を選び、この趣旨に沿った活動を目的とする親善訪問を企画した。同大学は、ドイツ連邦共和国における唯一の国立体育大学であり、ドイツ最大のスポーツ大学である。すでに過去において交流実績のある本学の重岡孝文教授に協力を願い、平成13年度海外派遣研究者(学長裁量経費)の募集に対して応募申請したところ、幸いにして採択され海外派遣を許された。

同行した重岡教授は訪問先の柔道担当教授クラウス・ケスラー *Klaus Kessler* 氏と親交がある。教授は昭和56年12月3日から1年間、日本体育協会のスポーツ指導者在外研修事業により西欧諸国に派遣され、視察研修を兼ねて多くのヨーロッパ人に柔道を指導しているが、歴訪中に交流したドイツの柔道指導者のなかにケスラー氏がいたとのことである。今回の訪独は、まずはケスラー教授との縁を頼って同校を訪問したものであった。

今回の旅は、2002年1月4日に鹿屋を出立し、翌日、関西空港からフランクフルト空港へ飛び、同月12日に帰国するという短期出張であった。元日から、マルクに替わってユーロが一般に流通し始めたドイツを体験することができた点においても有意義な経験であった。

滞在中、施設見学や授業参観をふくめた視察の傍ら、トカルスキー学長と面会をして芝山学長の

親書を手渡し、暫時、言葉を交わすなかで国際交流協定の締結に向けた当方の希望を述べることもできた。先方のスタッフを通じて、同大学の歴史、留学生の総数および出身国に関する分布データ、カリキュラムや就職状況の概要等についても資料を入手した。訪問の際に見聞した事どもと入手資料などを基に、以下、若干の報告をするものである。

ケルンという都市

ケルンは、ライン川沿いにある商工業都市で、人口98万人。旧西ドイツの首都ボンの北35kmに位置する大聖堂の町である。ベルギーやオランダの国境に近い。ドイツで最初に一般供用されたアウトバーンは、ケルン＝ボン間で、当時は中央分離帯がなかったとのことである。

行きはフランクフルトから大学のゲストハウスまで車で送ってもらったが、途中、ボンの南郊に進出しているトヨタの工場が見えた。帰りはケルン中央駅 *Hauptbahnhof* からフランクフルト空港まで特急列車 *IC* で戻ったが、ちょうど2時間で到着した。空港の直下に停車するので便利である。車窓からはライン川や小高い山頂にある古城などが見え、楽しい旅であった。素敵な遊覧船があり、夏ならライン下りが楽しめそうである。

歴史をさかのぼると、ケルンはローマ帝国の植民地として成立したようだ。約二千年の歴史を有するこの町の名は、コロニアというラテン語が訛ったもので、その名のとおり、ローマ軍のコロニーであった。のちカール大帝によって大僧正領に認定され、中世にはリューベックとともにハンザ同盟の盟主の地位を占めた。1794年にはナポレオン軍に占領されたが、1814年にプロイセンに合併された。

この町のシンボルは、なんといってもケルン大聖堂 *Dom* である。しかも、1248年に建立が決定、着工されてから1880年に完成したというのであるから、建設にかけたドイツ人の根気に脱帽させられる。聖堂は、高さ157m、奥行144m、幅86m。空高く聳え中央駅前に屹立しているが、その姿は荘厳幽麗というべきか、はたまた森厳雄偉と形容

すべきか、思わず息を吞んで立ちつくしてしまう。ことに近くで仰ぎ見た時、その威容は圧倒的な存在感と迫力とをもって我々に迫ってくる。しかも、このゴシック建築の古色蒼然たる姿は、日中、夕方、夜間と、時間帯によって醸し出す雰囲気を変化し異なる。夜はライトアップされて薄青白く、靈気漂う印象を受けた。堂内は薄暗く、靈廟の如き冷えびえとした神域である。その各所には、ステンドグラス、祭壇画、磔にされたキリスト像、三賢王の礼拝像、マリア像などのほか、礼拝室、古錆びたパイプオルガン等がある。

大聖堂のわきにローマ・ゲルマン博物館 *Römisch-Germanisches Museum* と、二つの美術館があるが、時間の余裕がとれず、見学はかなわなかった。この周辺には、聖堂を眺めながら飲食できる喫茶店があり、客で賑っており、ほぼ満席であった。店頭の名が出ていたドイツ名物アップフェル・シュトレーデルを注文してみた。たっぷりクリームのかかったアップルパイだが、甘すぎず、美味であった。食後、偶然のきっかけから、店内の隣席に坐っていた品のよい老婦人と歓談することができた。

古都ということで、京都市と姉妹都市関係にあるようだ。そのことは、市内に *Kyoto* 通りがあることにもうかがえる。繁華街には数多くの美術骨董店があり、退屈しない。訪問できなかったが、市内にはドイツ・スポーツ・オリンピック博物館がある。

この辺りには火口湖が多く、良質の水が得られるため、この水を使い、イタリアから入手したレシピによって化粧水、ケルニッシュ・ヴァッサー *Küinisch Wasser* (ケルンの水) が製造された。これがオー・ド・コロン (フランス語で「ケルンの水」の意) である。商標には数字が書かれているが、それは製造元の店の番地に由来する。1794年にナポレオン軍に占領された折、町の全戸に通し番号がつけられ、4711番地の家が香水製造元であったので、同店の商品は以後4711がトレードマークになった。市内には昔から続く老舗の店があるほか、同じブランドの商品が化粧品店や百貨店でも売られている。

中央駅から、日本で言うと銀座通りのような平日でも人通りの多い繁華なホーへ通り *Hohestr.* を約10分ほど歩くと *Neumarkt* (新市場の意) という広場に出て、そこから市電 (1番線) で約15分間、西郊へ進み、終点のユンカースドルフ *Junkersdorf* で下車すれば、徒歩1分で体育大学のキャンパス (とくに門塙も壁もない) に入構できる。

ケルン体育大学の歴史

ケルン体育大学は、1920年に創設されたベルリンの体育大学を前身としている。第2次世界大戦後の1947年に再建というかたちで創設された歴史をもっている。その前年、米英による西側占領地域のための体育大学に関する地域教育会議において設立が決議され、開設されたものである。

初代学長はカール・ディーム *Carl Diem* である。彼はケルン市によって建設された体育大学の創立時の学長としての職務を担い、死去するまで学長としてこの体育大学を指導した。彼の名は大学の所在地名となっており、学内を縦に貫く *Carl-Diem-Weg* という道があることにも、関係者の彼の功績を称える気持が伝わってくる。

1947年6月初めに予定されていた授業開始時期が遅れ、7月7日、ケルン競技場で95人の学生により、1学期が開始された。体育大学はケルン大学運動研究所の使命をも同時に引き受けた。

1962年、ノース・ライン・ウェストファリア州の高等教育機関へと昇格し、66年には学生数が1000人に達した。70年、レクター *Rector* (学長) 制度をもった大学として認定され、博士号とテニュアを授与する権利が認められた。80年にラインラント師範大学の体育コースを統合、82年には新しい学内管理体制と学部 *Faculty* 制度を導入した。すなわち学長や評議員会からなる執行部をもった管理部門と、3学部からなる各部局 (それぞれに学部長、教授会がある) とが組織されたのである。

1998年にカリキュラム改革が導入され、「スポーツ科学士」の学位が授与されることとなった。2000年にはヨーロピアン・スポーツ・ユニヴァー

シティに制定され、欧州における中核的な体育大学であることが自他ともに認められた。

今日のケルン体育大学

1) 自然環境

ドイツ留学体験者から、冬のドイツは氷点下10ないし15度まで下がる、と聞いていたが、厳寒を覚悟して訪れてみると、さほど寒さはきつくなかった。大学は広い林を開いて建設されたようで、数多くの樹高の高い樹木（白樺を含む）が保存されており、空気が清冽で美味であった。重岡教授の話では、かつてウサギやハリネズミも見かけたという。



構内の標識

1月のケルンは日が短い。朝は8時過ぎによりやく明るくなり始め、夕方5時過ぎには暗くなってしまう。朝晩の寒風は刺激的であるが、積雪は想像したよりもはるかに少なく、うすく地面にまぶした程度である。不思議なことに、南に位置するフランクフルトの方がより多く雪が積もっていた。着いた初日の路面は凍結して滑りやすく、危険このうえない状態であった。

朝は、「モルゲン！」（「おはよう」の意）という響きのよい挨拶が、学内の各所で、職員間や学生間で交わされる。ほとんどの学生がコートを着て通学しているが、1人だけ短パンに半袖シャツという軽装でリュックサックを背負い、寒風の中を走りながらキャンパスに入ってきた青年がいた。さすがは体育の学生であると、一驚を喫した。



本館エントランス



本館入り口前から見た研究棟

2) 施設・設備

広大なサッカー場とスタジアムの部分の敷地を除けば、ケルン体育大学の構内は本学のキャン



サッカー場



図書館



学寮（新棟）



学寮



学寮



スポーツ書籍購買部の外観



同 店内

パスと比較して、さほど広いわけではない。特徴的なのは、図書館がスポーツ関連書籍の収蔵数に

おいて世界一であること、数多くのスポーツ関係の学術書・啓蒙書を並べている書籍購買店



屋内陸上競技場



同 電動式傾斜トラック



競泳用プール



ダイビング用プール



喫茶室外観と屋外ピアガーデン



食堂外観

Hochschulbuchhandlung があり研究面の活性が感じられること、子供用のサッカー場があること、学生寮としてレンガ造りの古雅な二階建て建築 Wohnheim が幾棟かと高層ビル1棟があること等である。なお、ドイツ体育史を学んだ者なら、グーツ・ムーツの名を熟知しているであろうが、学内

には彼の名を採った道 Guts-Muths-Weg がある。本館エントランスを入ると広いロビーとなっており、中庭にはゼウスともポセイドンともいわれる古代ギリシャ人アスリートの均整のとれた裸体の銅像が立っている。

構内には幾つかもの体育館 Halle がある。また、



昼食時の食堂内部



昼食時の食堂内部



ゲストハウス室内



ゲストハウス室内



同 シャワールーム



大講義室

暖房の効いた屋内陸上競技場もあり、そのなかには可動式傾斜トラックの設備もある。場内観客席

もまた可動式で、不必要な際は収納でき、さらに屋外の外壁はフリー・クライミング設備となつて



ゼミ室



ゼミ室

いるとのことであった。ゲストハウスの前にはプールがある。プールは、競泳用とダイビング用、さらに児童用があり、競技用プールにはタッチパネル式の自動計時装置が備わっている。ゲストハウスと連結している隣の建物にはホッケー場があり、その地階が柔道場となっている。

ゲストハウスの部屋は、シンプルな作りながら、清潔で過ごしやすい。スチーム暖房とシャワー設備があり、収納スペースも十分で、絵画も掛けられている。学内の各部屋もスチーム暖房である。

教室の AV 環境は、本学に比して、さほど進んではない。大教室にはパワー・ポイントを用いてパソコンを駆使した講義を行う教官のためプロジェクターが設置されているが、それ以外は OHP での授業のようである。

学生食堂・喫茶室 Mensa は、連日、学生で賑わい、活気がある。前庭は、夏季にビアガーデンとなるようだ。

3) 学生数とキャンパスの雰囲気

約7千人が学籍登録している。本学の約10倍の規模だが、頂戴した大学史に所載の歴史統計によると、1960年頃には本学とほぼ同様な学生数であったようである。男子学生が61%、女子学生が39%と、本学よりも女子の割合は高い。

外国人留学生は、あらゆる大陸から来ており、63カ国から約450人が学んでいる。これは学生総数の約6パーセントにあたる。2000/01年度冬学期の資料によれば、アフガニスタンや北朝鮮から

も各1人が学んでいる。日本人留学生は、アジアでは最多の26人（男性19、女性7）である。とくに多いのはトルコで57人、次いでギリシャの46人が目立つ。

学生、とくに男子学生の多くは、本学の学生よりも筋骨たくましく、表情も大人びており、自信を持っている印象を受けた。

4) 姉妹校

ホームページ上では、姉妹校関係にある外国の21大学が列挙されている（わが国の日本体育大学を含む）が、実際には更に多く、すでに50以上の大学と国際交流協定を締結しているとのことである。

具体的には、アルゼンチン、オーストリア、ブラジル、ボリビア、ブルガリア、チリ、コロンビア、コスタリカ、チェコスロバキア、ハンガリー、イスラエル、日本、中華人民共和国、ポーランド、ポルトガル、ロシア、スペイン、トルコ、アメリカの諸大学とパートナーシップを結んでいるのだが、これに加えて EU のソクラテス/エラスムス計画とテンプス計画の枠組みにおいて西欧および東欧の30大学と交流協定を締結しているのである。

5) 研究組織

教官の所属している研究組織は、以下のように、専門領域ごとに三学部に大別されており、その下に各種インスティテュート等が帰属している。

第Ⅰ学部【教育学・人文社会科学】

スポーツ史研究所, スポーツ社会学研究所(社会学科, ジェンダー研究学科), 余暇学研究所, 教育学研究室, 哲学研究室, 心理学研究所(パフォーマンス心理学科, 健康心理学科), スポーツ経営管理学研究所(スポーツ経営管理学科, スポーツマーケティング・スポーツ・スポンサーリング学科, スポーツ法学科), レジャー研究所(レジャースポーツ・スポーツフォーオール学科, ヨーロッパ・スポーツ・レジャー研究学科)

第Ⅱ学部【医学・自然科学】

生化学研究所, バイオメカニクス研究所, 形態学・腫瘍研究所, 循環・スポーツ医学研究所(循環内科学科, パフォーマンス医学科), 生理学研究所(運動生理学科, エクササイズ生理学科), 障害者スポーツ・リハビリテーション研究所(医学的リハビリテーション・予防学科, スポーツ療法リハビリテーション・予防学科), スポーツ整形外科・外傷研究所

第Ⅲ学部【統合スポーツ科学】

トレーニング・運動学研究所, スポーツ教授法研究所(就学前・小学校体育学科, 中学校体育学科), 個人スポーツ研究所, 音楽・舞踊教育学講座, 運動文化創造研究所, 自然スポーツ・エコロジー研究所, スポーツゲーム研究所, スポーツ・ジャーナリズム研究所

社会が変化し, 運動や身体性およびスポーツの領域における問題の重要性が増すなかで, ケルン体育大学は過去10年以上にわたり, アカデミックな構造を変容させてきた。新たに付け加えられた専門分野は以下のとおりである。

スポーツ・ジャーナリズム	(1989年)
スポーツ経済学	(1989年)
ヨーロッパ・スポーツ研究	(1991年)
レジャー研究	(1992年)
スポーツ整形外科・外傷学	(1995年)

ジェンダー研究

(1996年)

このように拡張された学術構造のもとで, 同大学は, 教育科学/社会科学/行動科学のみならず生物医科学/自然科学の分野において, 広く多様な研究活動を行っている。

新しい革新的な組織原理に基づくインスティテュートとして注目すべきは, 1999年に創設された自然スポーツ Natur Sport・エコロジー研究所である。「緑の党」を政党として有するお国柄らしい。ここでは, スポーツと環境の領域における研究教育が行われており, 以下のような幅広い「自然スポーツ種目」等が提供されている。驚くべきは, 柔道の教官が同研究所の所属となっていることである。日本では, 柔道は「武道」に括られ, およそ考えられないことであろう。

スキー, 山岳スポーツ, 水上スポーツ, 自転車競技, 馬術, 流行スポーツ, スポーツ活動, スポーツ・ツーリズム, エコロジー, 環境教育, 環境コミュニケーション, スノーボード, マウンテンバイク, 雪上スポーツ, 地理学情報システム, アウトドアスポーツ, クライミング, 登山, 冬季スポーツ, 漕艇, カヌー, カヤック, 短艇, 帆走, サーフィン, 潜水, ダイビング, 自然保護, 環境保護, ツーリズム, 環境管理, ノルディックスキー登山, 柔道, フェンシング, 射撃, アイスホッケー等

研究棟3階の廊下の左右の壁には, ドイツの近代体育史の説明パネルが時期区分に分けて掲示されている。歴史を大切にし, 誇りとしている様子が感じられた。

6) 教育課程

学生が学ぶコースは, スポーツ科学コースと教師養成コースに大きく分かれているが, このほか補足的な分野としてスポーツ経済学がある。

労働市場の観察および卒業生に対する系統的なインタビューに基づいて行なわれた教育課程改革により, 1998/99年度の冬学期から新カリキュラムがスタートした。改革のポイントは, 学校以外



近代ドイツ体育史パネル



近代ドイツ体育史パネル



近代ドイツ体育史パネル



近代ドイツ体育史パネル

の職場に就職する学生のことを考慮して、主要研究領域を多様化したことである。すなわち、標準化された基礎的諸学問の上に、5つの専門分野、トレーニングとパフォーマンス、レジャーと創造性、予防とリハビリ、経済と経営、メディアとコミュニケーションを設定した。「体育学士」の学位は、「スポーツ科学士」の学位に名称が変更された。スポーツ科学コースの学士課程は8学期からなっている。

学生が1学期間に学ぶ週当たり時間数は、以下の通りである。「基礎」では、導入とオリエンテーションが2時間、スポーツの理論と実際/スポーツ活動が46時間、スポーツ科学の基礎が34時間。「専門」では、上記5分野が48時間、専門を超えたコースが14時間、選択領域が16時間となっている。

第1の専門である「トレーニングとパフォーマンス」の内容には、パフォーマンスの倫理的諸相

とトップ・パフォーマンス, 負荷計画と許容度, スポーツ診断とコントロール, 2ないし3種のスポーツにおける理論・実践・方法論, 学生による授業があり, 社会体験用オプションとして, クラブや協会その他スポーツ団体でのコーチ, 団体向けの競技スポーツ診断者, スポーツ用品メーカーの従業員が含まれる。

第2の専門である「レジャーと創造性」の内容は, 運動文化とレジャー・スポーツ, 計画・組織・経営, 創造性の教授法, 3つのレジャーと創造性領域における実践・方法論・理論, 学生による授業が含まれている。社会体験用オプションとしては, スポーツ協会, 教育団体, レジャー福祉協会でのレジャー・スポーツ相談, ダンス・劇場・ゲームないし文化施設での教師, 観光業・レジャー産業・共有施設での従業員やマネージャーがある。

第3の専門である「予防とリハビリテーション」の内容は, 阻害された機能の医学的基礎とスキル, 予防における方法, 治療とリハビリ, ライフスタイルと健康, 予防領域とリハビリの2分野における専門, 学生による授業である。社会体験用オプションには, リハビリセンターにおけるスポーツ・セラピスト, 健康保険会社や協会, 健康情報センターにおけるコンサルタント, 健康フィットネスセンター, 会社, スポーツクラブにおけるヘルス・インストラクターがある。

第4の専門である「経済と経営」の内容は, 経済学(市場, 商品, 価格), 経営管理(調達, 生産, 販売), スポーツ経営, マーケティング, スポーツ法である。社会体験用オプションには, クラブ・協会・州の機関におけるスポーツ・マネージャー, スポーツ・マーケティングや広告会社あるいはスポーツ用品の製造や貿易におけるスポーツ・エコノミスト, フィットネスやレジャーその他スポーツ機関のオペレーターがある。

第5の専門である「メディアとコミュニケーション」の内容は, メディア団体と歴史, コミュニケーション研究/ジャーナリズム, ジャーナリスティックな発表表現形式, マルチ・メディアとスポーツ, スポーツ・ジャーナリズムと編集である。社会体験用オプションとしては, スポーツ・ジャーナリ

スト(新聞, ラジオ, テレビ), クラブや協会その他スポーツ団体の報道コンサルタント, メディアや市場/意識調査の従業員がある。

学生の専門選択の分布を, 1998/99年度冬学期から1999/2000年度冬学期までのデータで示すと, 予防/リハビリが最も多く42%, 次に経済/経営が26%, メディア/コミュニケーションは20%, レクレーション/創造性は8%, 競技/パフォーマンスはわずかに4%にとどまる。

予防スポーツ/リハビリテーション系が最も人気が高いことがわかる。

教師養成コースには, 学生の約30パーセントが教員免許状取得を目指して学んでいる。他の諸教科を併せて学ぶ(通常はケルン大学で)ことにより学校教育のための第一州試験を受ける。小学校段階の教員資格と中学校段階の教員資格は6学期間を要し, 高等学校段階と特殊教育の教員資格は8学期間を要する。

ケルンにおける体育研究と結びつけて学ぶことができる学問としては次のものがある。生物学, 化学, ドイツ語, 英語, フランス語, 地理学, 歴史, ギリシャ語, イタリア語, 美術, ラテン語, 数学, 音楽, オランダ語, 教育学, 哲学, 物理学, 神学(ローマカトリックおよびプロテスタント), ロシア語, 社会科学, スペイン語, テクスタイル・デザイン, 特殊教育(学習障害, 聴覚障害, 心身障害, 視覚障害, 言語障害をもった生徒の教育とリハビリ), 経済学。

スポーツ経済学コースでは, 経済学とスポーツ科学を学ぶことにより, スポーツ経済学士の学位が取れる。4学期の間, 経済学はハーゲン大学の学習プログラムを遠隔教育で学び, スポーツ科学についてはケルン体育大学で通常の学習をする。

資格取得研究には以下のものがある。ヨーロッパのスポーツ研究, スポーツと環境管理, 治療教育, 医療訓練セラピー/外来患者むけ整形外科・外傷学的リハビリテーション, 適合した身体活動におけるヨーロッパ修士号, 運動とスポーツ心理学におけるヨーロッパ修士号, スポーツ・マネジメントにおけるヨーロッパ修士号。

さらにスポーツ科学を研究することにより, ス



掲示物（講義室ちかくの廊下の壁）

スポーツ科学の博士号を取得できる。以上の履修コースは、学部の壁を超えて、また学際的な仕方で組織されている。

大きな大学であるため、学生に提供される実技の授業メニューも豊富である。10人ほどの受講生からなるテコンドウやフェンシングのクラスも見



ダンス音楽教育用体育館での授業風景



ダンス音楽教育用体育館での授業風景

た。昼間、高齢者を集めたストレッチングのレッスン（おそらくヨーガであったのであろう）も見かけた。学生向けの掲示板には合気道についての情報も張り出されていた。

教授学・方法学 Didaktik があるため、例えば体操やサッカーを地域社会の子供たちに学生が教えている様子を見学することができた。また、ダンス・音楽教育用の教室では、たまたま太鼓を叩く授業を見学したが、初老の担当教授は学内で最も人気のある教師であるとの評判を聞いた。身体を使ったゲームの授業も楽しそうであった。芸術系やゲーム系授業からは身体を動かす楽しさが伝わってきた。身体運動におけるヒューマニティーが感じられた。

瞥見したにすぎないが、同大学ではスポーツ文化が花開いている印象を受けた。わが国では、「体育」という言葉が学術用語からも行政用語からも消えつつあるとのことだが、ケルンのキャンパスでは「体育」の思想が大切にされ、息づいているようである。

7) 学生の就職動向

卒業生の就職状況を分野別にみると、1986-90年から1995-97年にかけて、若干の変化が見られる。

予防/リハビリテーション系が40%台前半で最も多いことは変らないものの、レジャー/レクリエーションの分野では80年代後半に30%あったものが、90年代後半には15%に落ち込んでいる。経営/管理方面は、20%へ微増している。エリート・スポーツの分野は少数派とはいえ15%あったが、数%に激減している。逆に成長している分野がジャーナリズム/メディアで、7%から13%へ増えている。ダンス/音楽/運動劇場は微増で数%にとどまる。

これらのうち、常勤職に就けた者は、1986-90年で52.2%であったが、1995-97年では64.9%と増えている。フリーランスや自営業は、前期で22.8%、後期で13.5%である。非常勤職は、前期で26.1%、後期で34.2%、さらに職業訓練を受けたり進学した者は、前期で17.6%、後期で22%、卒業後に公務員研修中である者（教師）は、前期で

10.4%あった。家事／育児が、前期で9.9%，後期で13.5%いた。

親善訪問の成果

ケルン体育大学のゲストハウスに泊めてもらい、数日間キャンパス内を見学したが、フォーマルな交流としては1月9日が重要な意味をもつ日であった。

同日午前11時から、国際交流系の女性職員が大学の概要について OHP を用いて英語で説明してくれた。話を聴く際に、英文で書かれた大学案内の葉、DIMENSIONS と題した冊子、『健康促進と身体活動 Health Promotion and Physical Activity』という書名の本、その他、統計データ等の資料を頂戴した。昼食後、クラウス・ゲーベル Klaus Gebel 君が学内を案内してくれた。彼は大学院の博士課程の学生か助手らしい成熟した青年であったが、オーストラリアに留学体験があり、アメリカにも滞在したことがあるそうだ。我々だけでキャンパスを見学したのでは気づかなかった諸点を、同君の流暢な英語の説明によって知り得た。

同日午後4時すぎ、本館2階（日本で言えば3階）にある学長室を訪れた。ワルター・トカルスキー Walter Tokarski 学長は、友好的な大人たる態度で迎えてくださり、持参した芝山学長の親書を、本学の大学案内とともに手渡すことができた。

トカルスキー現学長は、スポーツ社会学、とりわけレジャー・スポーツが専門らしいが、以前ケルン体育大学のヨーロッパ・スポーツ研究所長の

地位にあり、1990年から欧州統合および欧州におけるスポーツ問題の研究に従事してきた人物である。統合されたヨーロッパにおけるスポーツ政策の指導者の一人と見てよかろう。お人柄は、親しみやすさのなかにも風格を具えたステーツマン・タイプの研究者である。2012年のオリンピック招致委員会の委員でもあられるなど、政治的にも多忙な毎日である様子であった。

今回の訪問の主目的は、本学がケルン体育大学との間において友好的な交流を推進し、近い将来において姉妹校として提携関係を実現できないか、その可能性を探ることであったが、必ずしも積極的な反応を得られなかった。学長は、国際交流協定締結の検討については具体的に言及されなかったが、両校間の学生交流および研究者交流については、推進を図れるよう、今後とも連絡を取り合っていきたいとの、前向きな示唆を得ることができた。表敬訪問の直前に書籍購買部で偶然に発見して購入した学長の編著『EU 法とスポーツ EU-Recht und Sport』を指し出したところ、喜んで署名をしていただいた。そのほか、学長からは、大学の名とマークの入ったネクタイ、欧州における運動文化を扱った冊子 Bewegung Europa, ケルン体育大学の歴史を解説した写真集 Bildbuch を、お土産として頂戴した。

翌日に面会したフロベーズ I. Frobüse 副学長からは、すでに数十の外国の大学と提携しているので、本学との協定に向けた交渉は受け入れがたい旨の言葉があった。それは、訪独直前に送信された国際交流担当の責任者ゾンネンシャイン Sonnenshein 氏からの電子メールの文面、すなわち、数を制限する意味からフォーマルかつ双務的な協定締結の申込は受け入れかねるが、学術的交流や学生交流は歓迎するとの趣旨の情報とほぼ同じ論旨であった。副学長からは『トレーニング・ブック 室内サイクリング TRAININGSBUCH INDOOR-CYCLING』という自著をプレゼントされた。

柔道場の入り口を入ってすぐ右の壁には、韓国人柔道家の写真とともにドイツ人柔道家ヴィーニケ Frank Wieneke 選手の写真が掲げられている。



学長室にて 差出された自著にサインする学長)

欧州柔道界における重岡教授の教え子筋に当り、ヨーロッパ・チャンピオンにしてオリンピック金メダリストとなった名選手で、現在、ドイツ柔道のナショナルチームのコーチをされているそうである。柔道場で重岡教授から紹介を受けたが、笑顔のすばらしい魅力的な指導者である。午前は実力者の若者を指導し、夜は地域の青少年を複数の指導者と共に熱心に指導していた。



久闊を叙する重岡教授とヴィーニケ氏

食堂では、サッカーを専攻している男子学生たち、バレーボールをしているという学生、ルクセンブルクから留学しているというバスケットボール専攻の女子学生、中国の北京からドーピング研究に留学している男性らと話す機会があった。

ドイツ人は、一見、アメリカ人のような気さくさはない。道行く人々も、冬ということもあり、やや沈鬱で、クールな表情が多かった。しかし、わずかな切っ掛けで、人間らしい暖かな素顔がの



空手家のドイツ人学生と

ぞくことが少なくなかった。学部学生の青年男女を初め市民とも親しく語り合え、参観した授業に歓迎され、親善友好の旅とすることができた。食堂で話しかけた青年の一人は、身長が190cmほどある奇抜な髪型で目を引く学生だったが、空手を習っていて日本について強い関心をもっていた。構内を歩く青年のなかに日の丸のマークを胸にあしらったスポーツウェアを着ている者がいたので、声をかけて訊ねてみると日本のバレーボールチームと交流した際にもらったとのことであった。

必ずしも十分な成果をあげることはできなかったが、それでも、欧米の大学との大学間交流協定に向けた教官の活動展開のうち、一つのステップと位置づけることはできよう。

本稿は、ケルン体育大学のホームページやゲストハウス受付で頂戴したケルン市街地図のほか、以下の文献を参照した。

- 1 早川東三、工藤幹巳編『ドイツを知るための60章』明石書店、2001年
- 2 地球の歩き方編集室『地球の歩き方25 ドイツ』ダイヤモンド・ビッグ社、[改訂]1999-2000年版

【ケルン体育大学から提供された資料】

- 1 THE GERMAN SPORT COLOGNE, DIMENSIONS
- 2 DEUTSCHE SPORTHOCHSCHULE KÖLN, INFORMATION BROCHURE
- 3 Development of the German Sport University Cologne

(文責：平沢信康)